マイナーなはなし

島　田　秋　彦

まきむくの　日代の宮は　朝日の　日照る宮
夕日の　日がける宮　竹の根の　根垂る宮
木の根の　根ばふ宮　やほによし　杵築の宮
真木さく　檜の御門　新嘗屋に　生ひ立てる
ももだる　槻が枝は　上枝は　天を覆へり
中枝は　東を覆へり　下枝は　鄙を覆へり
上枝の　枝の末葉は　中枝に　落ちふらばへ
中枝の　枝の末葉は　下枝に　落ちふらばへ
下枝の　枝の末葉は　ありぎぬの　三重の子が
捧がせる　みづ玉盃に　浮きしあぶら　落ちなづさひ
水コオロコオロに　是しも　あやに畏し
高光る　日の御子　事の　語りごとも　是をば

上の歌は昔々，地方豪族が天皇に忠誠を誓う証しとして実に不本意ながらも自分の娘を差し出したうちのある妥女が，殺される直前にせっぱつまって唱えたものである。天皇が宴会で大いに楽しんでいるとき，天皇の盃に酒を入れた。そのとき，フーッとそよ風がよぎった。「なんと気持ちの良い風なんでしょう！」とその妥女は思ったに違いない。この一瞬の油断が致命的なミスであった。彼女は，一枚の木の葉がその盃にプカプカと浮かんでいるのに全く気が付かなかったのである。激怒した天皇は，この妥女を打伏せ首に刀を刺しあて正に斬ろうとしたときに，「ちょっと待って下さい，天子様ッー〜」と脂汗をにじませながら腹の底からしぼりだして歌ったのである。

この話を読んで感じることは，妥女の哀さである。彼女たちは天皇の身の回りの世話をするために地方から強制的に出任させられた。いわば人質である。従って，彼女たちの命は天皇の気分次第でどうにでもなるのである。この妥女の命も所詮一枚の木の葉の重さを越えることはないのである。しかしだ。妥女の側から見ればこれはとんでもないことなのである。彼女たちは，一刻でも早く宮仕えから逃れるべく難がふりかからないように必死で生きているのである。彼女達の喜怒哀楽の声は本当は本当はものすごく豊富に無数にあるはずだ。しかし，私達はそのような歴史を知らない。

もう一つ，閑話一題。

八重山群島の西表島に行ったときのことである。エメラルドグリーンの色が眩しい海岸をあとにして一路亜熱帯樹林の繁茂するジャングルの中に入った。ジャングルの中は，むし暑く汗が乾かな

い。おまけに荷物が重くてバッグのベルトが肩に食い込む。半日歩いて，日が暮れてきたので川辺にテントをはってキャンプをすることにした。ジャングルの夜は不気味だ。突然野バトのようなコウモリがとび出してきてビックリさせるかと思うや否や月光に反射したサキシマハブの２つの目がこちらを凝視している。つまり恐怖のドまん中にいるのだ。そこで，泡盛を食らって不安をかき消すわけだが，そんなとき300m 程離れた対岸の山中から青光りする円らな視線がこちらを向いているのだ。それがしばらくすると移動し徐々にこちらに近づいているように見えるのだ。山をおりてから地元の古老と話す機会があったので，これを訊ねてみた。すると驚べきことに，それは現地語でヤマピカリといって２ｍぐらいの超大形のイリオモテヤマネコでヒョウのように動作が機敏で牛をも襲うというではないか。クワバラクワバラ・・・。老人はついでにこんなことも教えてくれた。「西表島では昔は石炭を掘っていたんだが，炭鉱夫達はずいぶんひどい目にあったさー。今でも炭坑跡があるよー。」ここの語は何故か語尾がのびる。そこで，早速炭坑跡を見に行った。サキシマハブに咬まれないように注意しながらヤブをかきわけて奥に行くと確かに坑があった。聞くところによると，炭鉱夫と住民との接触は禁止され閉じ込められていたらしく脱走事件も結構あったらしい。そこでもやはり炭鉱夫達は悲惨な生活を強いられていたと聞いた。このような話をきくと，小生はウーンと唸ってしまう。西表島を囲むエメラルドグリーンの海は筆舌に尽くし難いほどに美しい。緑はこちらではお目にかかれないほど深くまぶしい。真夏は太陽が２つあるといっても誰も冗談に思わないくらい暑い。この昼のあいだは，時間と思考は停止している。ここにいると労働とか経済というのは温帯地域の特殊な概念ではないかと自然に納得してしまう。本土からの流れ者が，流れ流れて最後に住みつくところだというのもよくわかる。それに何といっても，海や山があまりにも美しい。それなのに，なんでこんな悲しい歴史がこの島にあるというのか。どうも，ちぐはぐな感じがしてスッキリしない。小生の頭の中のこのギャップを埋めるには少し時間がかかりそうである。

現在は，過去のためにあるのだろうか。それとも未来のためにあるのだろうか。現在というものをより良く理解するためには過去の歴史が重要なのか，未来の予測が重要なのだろうか。解答は，きっとこのような単純な二者択一式で選べるようなものではないだろう。しかし，小生の性癖として過去の忘れさられたマイナーな歴史に視点がいく傾向にある。もちろん，メジャーなものを見ろといわれると全くその通りなのだが，どうもマイナーなものの中に真実が隠されているに違いないとついつい思ってしまうのだ。小生のこのような性癖は，おそらく環境科学に無意識に反映されるであろうから環境科学はますますマイナーになってしまうのかしら？いや，反対にますますメジャーになるのかしら？神のみぞ知る！